



イファット だより

～農民参加なくして農業なし～

第39号



**特集：マダガスカルでのJICA草の根技術協力：短期専門家の活動
(山の中を歩いて活動地に向かいます)**

目次

- ・P 2 マダガスカルでのJICA草の根技術協力に参加して
住民サポート支援体制強化・グループ活動支援専門家 澁谷 喜久
- ・P 6 マダガスカル(アムルニマニア県 3 市)を訪ねて
生活改善アプローチ・グループ活動支援専門家 清水 千鶴
- ・P 7 短期専門家の清水氏・澁谷氏とマダガスカル出張に行っていました
主任研究員 積 奈津子

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク

NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

JICA草の根技術協力：マダガスカル共和国 生活改善アプローチを通じた若年女性 による 栄養改善推進プロジェクト（マダガスカル語名略称 ROSO） 短期専門家報告

マダガスカルのJICA草の根技術協力に参加して

元 群馬県農業改良普及員/ 農政部長
グループ活動支援 専門家 澁谷 喜久

想像したよりもはるかに広大で、真っ赤な大地。表作の稲作が終わり、裏作の野菜栽培のために、独特の農具を使い家族総出で畑を耕し高い畦を作る農家。

2頭のコブ牛が引く牛車と裸足で歩く子供達。その横を大型トラックや車がスピードを出して通り過ぎる。道の途中のマーケットは賑わい、喧噪の中、湧き出すように人が次々と現れてくる。

短い期間でしたが、マダガスカルでの活動で感じた一端を述べたい。

1 女子中学生達との出会いの中で

(1) 自分の言葉で夢を語る

プロジェクトサイトを訪問。若年女性を対象にグループが組織され、幸せツリーに基づき、できることを一つひとつ改善に取り組んでいる。

目を見張ったのは、女子中学生のグループ。自分達の取り組みを自分の言葉でしっかりと述べてくれた。「以前は嫌いだった家の片付けをするようになり、自尊心が芽生えて来た」「グループで野菜栽培を始め、販売した代金でウサギを買い、将来はこれ売ってブタを買って販売し、自分達の学費に当てたい」夢を語る中学生の瞳はキラキラしていた。

リーダーシップを発揮し始めている子、恥ずかしがり屋だがグループ活動を楽しんでいる子など、清水さんが常々話すグループ活動のあり方「十人十役」が実現されているようだ。

（※十人十役：グループ活動では参加者一人ひとりが重要な役割を持っていて、それぞれの個性を発揮することが活動の活性化に繋がること。）

(2) 話し合いで課題を解決することの価値

「活動をする中で問題が出たが話し合っ解決した」と発言した中学生に、どんな課題をどのように解決したのか質問。「当初決めた日に皆が集まれないので話し合い、土曜なら全員集まれるのでグループで作業することにした」との回答。



写真1：キラキラした瞳で夢を語る中学生達

当たり前で大したことはない内容と思う人もいるかもしれないが、目の前の課題を自分達が話し合っ解決し、決めて実行したことに大きな価値がある。一つひとつの課題解決を積み重ねることで、彼女達が成長し、地域の中で輝く存在になっていくことだろう。

お婆ちゃん世代の女性にも聞いてみた。「彼女達の取組みをどう思っていますか？」

「野菜を購入して応援しているよ！」との答え。

当初は野菜栽培に反対していた両親世代に加え、地域のお年寄り達も味方にしたようだ。

(3) ワークショップを通じて高まる意識・知識

もう一人、印象深い中学生に出会った。1人で畑に出ていてニンジンの発芽を確認していた。

栽培研修を受け、研修内容に忠実に実践を始めたそうだ。その他、サヤインゲン、青菜なども丁寧に栽培している。

ニンジンの発芽状況は測ったように正確だ。細かい種なので、種まき作業は根気のいる仕事だが、一粒一粒しっかりと種まきをしたことが想像できる。間引き作業も楽になり、品質の揃ったニンジンが収穫できるだろう。

今回、記録の重要性を話す予定があったので、彼女に聞いてみた。「栽培記録をつけていますか？」と。彼女は自信に満ちた表情で「はい！」と答えた。

後日の発表会の際に、彼女が参加していたので記録のことを再度聞くと、彼女はすかさず持ってきた手帳を出して見せてくれた。

質問の内容を覚えていただけでなく、忘れずに記録された手帳を持ってくる。まだ、野菜栽培に取り組み始めて僅かな期間だろうに、その意識の高さ、意欲に感動した。私が提案した記録票を使ってみるか尋ねると、力強く頷いてくれた。



写真2：研修内容を忠実に実践し野菜を栽培する中学生

乾いた大地が水を吸収するように、彼女もこのプロジェクトを通じて様々なことを学び成長していかう。

(4) 彼女達との出会いを通じて

現状と夢のギャップ（課題）を認識し、具体的な目標を掲げ、計画を立て、実際の行動に移して課題を解決する。この後、しっかりと評価を行い、良いことは継続し、改善点や反省点を次に活かすことができれば、これはもう立派な課題解決学習になる。



写真3：野菜栽培について真剣な眼差しで質疑応答

それぞれがテーマを持ち、身近な課題を解決し、小さな成功体験を積み重ね、着実に階段を登ることで、やがては大きな実をならせることだろう。彼女達が自分で考え、課題解決に向けて自ら活動できる人材として育ち、やがては地域のリーダーとして成長していくことを期待したい。

2 プロジェクト成功の鍵「チームビルディング」

(1) 寄り添いの姿勢を貫く

プロジェクトを成功に導く鍵は、何と言ってもファシリテーターの参加者（対象者）に対する寄り添う姿勢だ。

初日の現地訪問の終わり頃、一人のファシリテーターが、伏し目がちの少し元気のない女性の肩をそっと抱いて、清水さんと私のところに近づいてきた。

「この女性はご主人とお酒のトラブルがあって一度別れたけれど、またやり直そうとしている。でも、時々元気がなくなるので励ましてやってください」と。

清水さんが「あなたは一人じゃないのよ。困った時は仲間やファシリテーターの方たちにも相談して、問題を抱え込まずに頑張って！」と励ますと、その女性は笑顔になり小さく頷いていた。

普及活動において、「農家(対象者)に寄り添うことが大切」と我々はよく口にするけれど、このファシリテーターのように自然に、そして機会を捉えてできるものだろうか。

この事例に限らず、プロジェクトを通じて、ファシリテーター一人ひとりに、普及活動の肝である寄り添いの姿勢が着実に培われてきていると感じた。

(2) 合意形成で目標に向かう

発表会準備の会の終盤に、セッション資料の見直しについての議論があった。セッション資料はファシリテーターが現地活動を行うための手引きともなる重要な資料だ。最初に作成したときは相当な時間を費やして完成したと伺った。

今回は担当分けをして効率的に見直しを行ってはどうかとの提案に対し、殆どのファシリテーターが全員で行うべきとの意見。プロジェクトの趣旨、活動方法など、全員が資料の見直しを通じて合意形成を行い目標達成に向かうべきだという意志を持っていると感じた。



写真4：セッション資料について真剣に議論

プロジェクトを成功に導くための、ファシリテーター一人ひとりが高いモチベーションを持ち、それを十二分に発揮するところにある。セッション資料の見直し検討はモチベーションアップのための大切な場であり、プロジェクトの戦略会議、戦術会議にも位置づけられるものだ。

徹底した合意形成が一年目の成果に繋がっているといっても過言ではないだろう。

(3) リーダーはいつも笑顔で

「自分たちで考え、楽しんで周りを幸せにしながら、実践する」プロジェクトのスローガンだ。

ファシリテーターの皆さんは、とにかく明るくて、いつも笑顔。プロジェクト参加者の皆さんが明るい表情で楽しみながら活動しているのも、この笑顔があるからだろう。



写真5：この笑顔がプロジェクト推進の原動力

発表会の終りに私が簡単なコメントをした後、MCを担当したリジャさんが補足してくれた。

「普及員は笑顔が大切だと、澁谷さんが教えてくれたんですよ」と。

「リーダーは上機嫌で希望の旗印を掲げ続けよ」日本の冒険家 三浦雄一郎さんの言葉だ。参加者の幸せツリーの実現を支援するという旗印を笑顔で掲げ続け、参加者とともに歩む。ファシリテーターの皆さんの笑顔から、その使命感をひしひしと感じた。

3 組織活動の自律（自走）に向けて

事業やプロジェクトには必ず終期がある。そこで課題となるのは、育った組織の活動をいかに自律（自走）させていくか。日本の普及活動でも同じ課題に直面することは多々あり、活動が停滞・消滅したりすることがあるのも事実である。

「せっかく組織化し、活動が活発になったグループを維持し、さらに活動を活性化したい」誰もが願うところだ。今回の訪問でもその課題に対する助言を求められた。

(1) 内発的動機づけの重要性

自律的な活動においては、自ら進んで活動に取り組もうとすること、すなわち「内発的動機づけ」を高めることが重要である。この点において、プロジェクト当初は現地で「なぜ、物やお金を配らないのか」といった声が上がったが、丁寧に対応し理解を深めてもらい、「楽しく続け自分だけでなく周囲も幸せにしていこう」ということがコンセプトとして浸透している。

マダガスカルプロジェクトにおいて、IFPaTのこれまでの知見を基本に、プロジェクト開始当初からこうした内発的動機づけがしっかり行われていることは、自律した組織活動を進める上で大切なポイントだと思う。

(2) 民主的なリーダーの発掘・育成

自律的な活動が行うためには、グループ員の声を聞き、合意形成を行い、目標達成に向けて一緒に取り組める、民主的なリーダーの存在が欠かせない。

地域に存在する様々なタイプのリーダーを、課題や取組内容に応じて発掘、育成する。「自分のためだけでなく、他の人のためにも汗をかける人」、理想論かもしれないが、そんな存在をプロジェクトの期間に発掘できればと思う。

(3) 参加者、ファシリテーターのモチベーションを高める

モチベーションを高める方法は様々あると考えられる。私も参加させていただいた発表会もその一つである。多くの人を前に、また知事を始めとする行政を司る人達に対して発表を行うことで、自分の活動に自信を持ち、モチベーションは一層高まるだろう。

野菜栽培の成果を経営面も含めて発表するのも面白い。日本では新規就農者や青少年グループ（4Hクラブ）のプロジェクト活動として取り組んでいる。



写真6 グループ活動の成果発表会での一コマ

また、取り組み状況、活動の成果、優良事例などを丁寧に拾い上げ、共有し、情報発信することや、成果を上げた事例、ファシリテーターの活動を表彰することなども、モチベーションのアップに繋がるのではないだろうか。

さらに、ファシリテーターの側としては、上手いかなかった点や改善事例などもしっかり蓄積しておくことが大切になる。失敗は成功の母なのだから。

お金のかからない形でモチベーションを高めるにはどうしたらよいか。現地で活動する皆さんのアイデアに大いに期待するとともに、我々も宿題として答えを考え続けたい。

4 おわりに

今回、マダガスカル国を訪問する貴重な機会をいただき、IFPaTの皆様には心より感謝申し上げます。渡航準備から帰国まで積PMマネージャーにきめ細やかなご指導、ご支援をいただくとともに、現地活動においては、釣本現地調整員の熱意溢れる活動に大いに助けられました。さらに、フィフィさんには的確な通訳で私達の語学力のなさを補っていただきました。

幸せツリーの目標に向かって人々の行動が変容し、幸せを実感できるよう、プロジェクトにかかわる皆様には、引き続き、熱い思いを持ち現地に寄り添った活動を展開いただければと思います。

応援しています！ ミサオチャ！

まず一番素晴らしいと思ったのは、中学生の子供たちや子育て中の若いお母さんが、野菜を作り、週末にその野菜やケーキを販売する、ウサギや鶏を飼ってお金を貯める、家の片づけやゴミ箱の設置で気持ちよく暮らす、家に新しくトイレを作る、共同で地区のトイレを作り始めるなど、それぞれ個人やグループで考えて実行している点です。さらに話を伺うと、野菜を売ったお金を貯めて将来の学費にしたい、売上から人参、インゲン、ズッキーニなどの野菜の種を買って種類を増やしたい、ケーキの材料に使いたい、とのことでした。また、グループで毎週、各戸から1カップの米を持ち寄って貯めておき、グループ員が困った時に活用するという、相互扶助の仕組みを作っている事例もありました。ある女性が、孫がグループの仲間と毎日、野菜作りを楽しそうにやっている姿を見て「これで若くして母親にならずに済むので、安心した」と話してくれた言葉には、ハッとさせられました。すでに野菜の栽培・販売記録簿をつけている事例などもあり、どれも素晴らしい活動ばかりでした。



マダガスカル(アムルニマニア県3市) を訪ねて

元群馬県生活改良普及員/普及センター所長
生活改善アプローチ・グループ活動支援専門家
清水千鶴

私はこれまで、生活改善事業の現地指導として中南米での経験はありましたが、アフリカは初めてでした。昨年11月にマダガスカルのROSO活動でアムルニマニア県の各関係者が群馬県で研修されたので、ある程度の状況は理解していたつもりでしたが、この度現地を訪れて、多くの衝撃を受けました。



写真：すっかりみんなと仲良しの清水さん

今回、野菜の専門家でもある澁谷さんと一緒に現地に伺え、とても心強かったです。栽培技術の助言から記帳、計画づくりまで、親身になって相談に乗ることができたと思います。また、県各局の関係者のみなさんが、とても仲良く話し合われている姿が印象的でした。IFPaTがプロジェクト導入時から、合意形成に力を入れてきた成果が伺えます。昨年、群馬県に研修に来られた方々がリーダーシップを取られて、明るく、積極的に進めている様子も伺え、とても頼もしく思えました。

栄養改善の取り組みは、早ければ早いほど高い効果が期待できます。特に母子の健康維持の観点からも、できるだけ早期から摂取を広めていく必要があります。また、若い世代はプロジェクトの理解が早く、自分たちで考えて実践する力に長けているため、今後の活躍に大きな期待が持てます。今回の訪問で感じたことは、このプロジェクトのスローガン通り、活動している方々が『笑顔であること』『自らやりたい』と始めていて、『自信を持ってやっていること』でした。すでに『何かをやれば、自分が変わる』という実感を抱いている人が多いと思いました。

今後の活動への期待として、まずは「野菜を作って、自分たちで食べる（栄養改善）」の大切さの共有、その上で、余剰野菜の販売や、雨季などの端境期（はざかいき）のための加工技術の習得、野菜や加工品の販売記録の習慣化、年間の野菜栽培計画や加工方法の策定、身の回りにある資源の活用、薪の消費を減らせる「簡単かまど」作り、規則正しい生活習慣や家族の役割分担づくりなど、できることから少しずつ実践していくことが大切です。

高校生や大学生の発表パフォーマンスを見て、彼らの情報発信能力の高さに驚きました。SNSの活用や、地域の大きなお祭り・大会などを通じて、現地の素晴らしい活動を広くアピールする機会を作ってみてはいかがでしょうか。また、この活動はボトムアップだけでなく、市長などトップ関係者へのアプローチも重要であるため、今後ともプロジェクトマネージャーや現地調整員のみなさんのご努力に期待しています。

滞在中、「サラマ」と「ミサオチャ」の2語だけでも私が安心して過ごせたのは、フィフィさんと積さんのきめ細やかやかで温かい通訳のお陰です。また、いつも地元の方々に寄り添って活動されている釣本さんに

も、大変お世話になり、感謝申し上げます。人を育てる事業は、どうしても時間がかかりますが、このプロジェクトを経験した少女たちが大きくなった時、きっと地域の立派なリーダーになってくれるはずです。未来への先行投資として、この事業がこれからも継続し、多くの地域へ広がっていくよう、ご支援をお願いいたします。



短期専門家の清水氏・澁谷氏とマダガスカル出張に行っていました

プロジェクトマネージャー
主任研究員 積 奈津子

2026年6月3日（水）～2026年6月14日（日）に短期専門家の清水氏・澁谷氏とマダガスカル出張に行っていました。今回の出張の目的は以下の3つです。

1. 日本の生活改良普及活動・農業改良普及活動の経験をもとに、女性たちの改善活動・グループ活動への助言を行う。

お二人は2025年度に実施した第一回本邦研修の視察受け入れにもご協力いただき、群馬県の生活改善活動や群馬県が支援した女性農家さんたちの活動訪問にご協力いただいたところでした。

今回の訪問では、対象地域のグループ活動を見て周るとともに、普及員・女性に向けた研修会の実施、そして発表会への参加をいただきました。

一緒に同行した私から印象的だった点は以下の点です。

1. 日本からの訪問者がいることで、村の女性たちが張り切り、グループ活動を誇らしげに見せてくれました。女子中学生たちが販売してくれているグジュグジュというケーキを訪問に合わせて準備してくれていたり、栽培記録をつけたノートを握りしめて持ってきてくれたり。そしてその成果が確認できるように、うまく引き出してくれたFC（ローカルファシリテーター）も準備に向けて成長したように思います。

2. 記録の重要性をお二人から丁寧に説明いただきました。ケーキや野菜を売った記録をつける習慣、加工の計画表、野菜の栽培記録、などなど記録をつ

けることが気づきにつながり、プロジェクトが離れた後も自走できる環境につながるという指導はとても印象的でした。記録をつけることを難しく考えず、カレンダーへのマークでも良いし、ちょっとしたメモでも良い。そんなメッセージも励みになっていました。

3. プロジェクトが対象としている女性たちの年齢（15～25歳）について、元々は栄養改善の観点から考えての設定でした。妊娠前に女性たちが良い栄養状態であることは非常に重要であり、かつこの年代を対象にしたプロジェクトは少ないためです。今回、清水専門家から、生活改善アプローチの観点からも「若い世代を対象とすることで、飲み込みが早い」、いいターゲティングだとお墨付きをいただいたことは嬉しい発見でした。

4. 訪問時はちょうど裏作農業が始まったところ、対象地域の農業を蒔谷専門家から俯瞰的に教えていただいたことはとても有意義でした。例えば、高冷地であるために葉物は虫に食われにくく、有機栽培に向いている地域であること。裏作として盛り土を作することは重労働であるが、グループ活動で楽しく作業することで女性たちが乗り越えていたこと。農業は女性たちの生活においても、プロジェクトにおいても重要視している部分であり、貴重な視点を獲得することができました。

プロジェクトは9月より2サイクル目に入って対象地域を広げています。今回の出張でいただいたご助言も含めながら、ますますパワーアップしていきたいと思います！

参考：草の根事業の概要	
プロジェクト目標	生活改善アプローチを通じて若年女性の栄養改善行動が実践され、栄養改善を支援する仕組みが構築される
期待される成果	1. 生活改善アプローチを活用した栄養改善を促進する人材が育成される。
	2. 生活改善アプローチを活用した栄養改善の手順が再整備・改善され、手順に沿って若年女性が栄養改善行動を実践する。
	3. 若年女性の栄養改善行動を支援するための住民主体のサポート体制が構築される。

イフパットだより39号に寄せて

私、永井は、中米コスタリカで私たちIFPaTが2016～2019年に実施したJICA草の根技術協力「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業」に従事しました。

日本の生活改良普及員の経験が基になる「生活改善アプローチ」は多様な生活の質の改善に対応し、活動参加者の意識改革を図り「いつでも、どこでも、誰でも始められる」開発手法です。

自分たちには何もなく何もできないと、口を開けて支援・援助を待っているだけの住民が、自律的に改善を進めて行く姿を見たとき、「生活改善アプローチ」の効果と重要性を実感できました。

今、アフリカのマダガスカルで生活改善アプローチの手法を用いて若い女性を対象とした栄養改善の活動の草の根技術協力が実施されています。仲間とともに、自らの栄養改善、家族、そして集落・地域住民の栄養改善を図る活動が広がり、ひいては仲間と始めたグループとしての栄養改善の活動が、集落の社会・経済の発展に結びつく事業へと発展することを願っています。

飛躍した話ではありません。グループ活動が地域の社会・経済発展に具体的に結びついたとき、地方政府が動き、地方政府と住民との協働による地域の広範な開発が始まります。持続的地域開発の第一歩です。

編集文責 永井 和夫

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL：029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <https://npoifpat.com/>